

解説

附属高等学校 3 年体育

タイトル：体育の授業で培われる資質・能力に関する一考察 ―生徒の記述からみる省察的思考力と内的統制感について―

授業者：丸山実花 教諭・河西静香 教諭

解説タイトル：

動きの中の思考と統制―体育授業におけるコンピテンシーの育成

コンピテンシー育成開発研究所
特任講師 Claudia Gherghel

「体育の授業で培われる資質・能力に関する一考察―生徒の記述からみる省察的思考力と内的統制感について―」は、高等学校における体育の授業を通じて生徒に育成される資質・能力を、生徒自身の記述に基づいて分析した調査報告である。調査対象者は高校 3 年生であり、3 年間の体育の授業を振り返り、最も育成されたと感じるコンピテンシーを選び、その理由を記述する形式の質問紙調査が実施された。調査の結果、最も多くの生徒が選択したコンピテンシーは「協働力」、次いで「省察的思考力」、「内的統制感」であった。協働力に関する分析は別で報告されており（丸山・河西 2024）、本論文では次に多く挙げられていた「省察的思考力」と「内的統制感」に焦点が当てられている。

省察的思考力とは、自分の行動や経験を振り返り、気づきを得て改善へとつなげる力である。調査では、多くの生徒が毎回の授業で記入していた「振り返りシート」の存在を挙げており、それを通して自分や仲間の動きを分析し、課題を把握し、次回への目標を設定していたことがわかった。さらに、技術面だけでなく、戦術的な工夫や他者との協働の中で頭を使って運動をすること自体に楽しさを見出している様子もうかがえた。

一方、**内的統制感**とは、自分の行動が成果や結果をもたらすという信念のことであり、努力と結果の因果関係を肯定的に捉える力である。生徒の記述には、苦手意識があったが、練習を重ねてできるようになった、自分のプレーがチームに貢献していると感じられた、といった成功体験が多く、技能の習得だけでなく、その達成感を自己の努力と結びつけて認識している様子が見られた。また、仲間からの励ましや称賛も、自信や有能感の獲得に寄与していた。

当該の体育の授業では、生徒の主体性を尊重する種目選択制が導入され、多様な種目を扱う中で、仲間とともに試行錯誤する環境が意図的に作られている。また、授業後の振り返りの記述活動も全学年で継続的に実施されており、記録と言語化によって、身体活動が認知的・内省的な学びにつながる。体育を通じて「自分で考え、動き、振り返る」という一連の学習サイクルを経験することは、生徒の主体的な生き方の基盤となる力を育むものと位置づけられる。